

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：34425

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520727

研究課題名(和文) 非言語行動の許容度とコミュニケーション距離に関する日中韓比較研究

研究課題名(英文) Comparative research on tolerance for non-verbal behavior and communication distances among Japan, China and Korea

研究代表者

曹 美庚 (CHO, Mikyung)

阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30351985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、非言語コミュニケーションと深い関わりを持つタッチ性向に注目し、タッチ性向の違いをパーソナリティ特性によって説明することである。日韓の大学生を対象とした比較調査の結果、日本と韓国の大学生のいずれにおいても、パーソナリティ特性のうち、特に外向性と情緒不安定性がタッチ性向に有意な影響を与えていることが確認できた。さらに、幼少期におけるタッチ経験の高低が、パーソナリティ特性とタッチ性向との関係において調節変数として機能していることも明らかとなった。これまで独立的に行われてきたパーソナリティ研究とタッチ研究の融合を図ったことは、本研究の大きな貢献といえる。

研究成果の概要(英文)：Touching plays an important role in nonverbal communication. However, there are individual differences in the propensity to touch in that some persons like touching and others do not. The purpose of this research is to explain the differences in the propensity to touch according to individual personality characteristics. We attempted to show clearly which aspects of personality traits are related to the propensity to touch. This research aims to integrate two major research fields: the study of personality traits and the study of touch as a means of nonverbal communication. Based on the results of the survey, it was shown that the Extraversion and Neuroticism factors of Big Five have significant influence on the propensity to touch. Furthermore, it became clear that the impact of touching experiences with the mother in childhood on the propensity to touch in adolescence is significantly mediated by the Extraversion factor of Big Five.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：異文化コミュニケーション 非言語行動 タッチ性向 パーソナリティ コミュニケーション距離 タッチ経験 Big Five 対人関係

1. 研究開始当初の背景

明治36年(1903年)、岡倉天心が早くも『東洋の思想』において「アジアは1つ」と書いている。まさに今や情報化の進展と交通手段の発達により韓国と中国は日本からの出勤圏内に入っており、ランチや買い物が可能な一日生活圏内に組み入れられ、真の文化共存圏が出来上がっている。民間レベルでの異文化交流は勿論、メディアによる互いの大衆文化の交流も非常に活発になり、異文化理解も急速に進んでいる。お互いを理解し合うための濃密なコミュニケーションが交わされていることから、同一文化圏としての高い文化類似性が実感できるといえる。しかしながら、感情表現や非言語行動に関わるコミュニケーション方法においては、文化の繊細な部分への認識や理解は未だ不十分である。一つの文化においてコミュニケーションの円滑化を図るために行われた非言語行動が、他の文化のもとでは脅威や嫌悪感をもたらすものであったり、タブーに該当するものであったりして、異文化間での多様なコミュニケーション・トラブルに発展するケースも少なくない。

これまでの異文化コミュニケーションの研究においては、「デジタル文化とアナログ文化の対比」や「低コンテクスト文化と高コンテクスト文化の対比」などがよく取り上げられてきた。デジタル文化・低コンテクスト文化の西歐文化とアナログ文化・高コンテクスト文化のアジア文化との間では、あらかじめ文化的相違を想定した上でコミュニケーションが試みられることが多いため、お互いの違いを前提に寄り添う努力を惜しまない。一方、同じ高コンテクストのアナログ文化圏の中では、文化の高い類似性ゆえにお互いの文化に対する理解度も高く、時には全く同一であると錯覚するほど共感度が高い場合もある。しかしながら、文化の類似性や共感度が高いことにより、コミュニケーションにおいても期待値が高く、異文化間の相違が想定されないままコミュニケーションが図られたり、異文化間の相違を受け入れがたい側面があり、意図しない想定外の誤解を招くことがしばしばある。

曹(2001)^{*}では、非言語行動への理解不足が異文化コミュニケーション・トラブルを引き起こす可能性を高めていると指摘し、韓国人の間でよく見かけられる、コミュニケーション円滑化のために行われる非言語行動としての「スキンシップ」に注目した。また、曹(2008, 2009, 2010)の一連の研究では、E. T. Hall(1976), *Beyond Culture* や G. Hofstede(1991), *Cultures and Organizations: Software of the Mind* などに見られる「デジタル文化とアナログ文化の対比」や「低コンテクスト文化と高コンテクスト文化の対比」、あるいはマレービアン(1986)、Hall(1970)、渋谷(1985)、西出(1985)などによる対人距離やパーソナル・ス

ペースに関する研究を踏まえた上で、日本人と韓人大学生を対象にパーソナル・スペースならびにスキンシップ許容度の相違に関する質問票調査を行い、その分析結果を詳細に報告している。そして、韓国や中国の場合、日本と同一文化圏に属し文化の類似性が高いにも関わらず、コミュニケーション距離において日中韓の間にはかなりの相違があり、それが異文化コミュニケーションの場面で想定外のコミュニケーション・トラブルを発生させる要因の一つであることを明らかにしている。

2. 研究の目的

曹(2001, 2006, 2008, 2009, 2010)におけるこれまでの資料収集や分析により、異文化間コミュニケーション・コンテクストを理解する方法として、非言語行動への理解が不可欠であることが示唆された。一連の研究では、とりわけスキンシップの許容度とコミュニケーション距離に関する基礎的なデータを大量に蓄積してきた。人間のコミュニケーション活動の7割は非言語行動によるものといわれており、これまでも、異文化コミュニケーション理解のための非言語行動については、サインやジェスチャーに関する数多くの記述分析研究が行われてきている。しかしながら、コミュニケーション・コンテクストを理解する補助手段としてのスキンシップの含意を記述分析する研究、あるいは異文化コミュニケーションの場面で起こりうるコミュニケーション距離によるコンフリクトの特徴分析やトラブル分析、それらの分析を基にした問題提示、ならびに理論構築が十分になされているとは言いがたい。

本研究の目的は、言語活動の補助手段として普遍化されている非言語行動を分析することにより、異文化理解教育に役立つ理論的フレームワークを構築することである。非言語行動の中でも、特に、パーソナル・スペースやタッチング許容度に見られるコミュニケーション距離の分析に重点が置かれている。パーソナル・スペースやタッチング許容度は暗黙知に属するものであるため、異文化間では、コミュニケーション送受信者同士の意図や解釈にズレが生じやすい。タッチングは他者への原初的な伝達形態として、心の深層に直接的な影響を与えるコミュニケーション手段であるため、異文化適応による内面化までには時間がかかる。本研究では、タッチングのような暗黙知の内面化について考察を行い、異文化間コミュニケーションにおける文化的特異性ならびに普遍性を明らかにすることに注力した。

3. 研究の方法

上記のような研究目的を達成するためには、スキンシップ許容度についてこれまで蓄積してきた定量的データを分析するだけでなく、非言語行動的側面から異文化コミュニ

ケーション場面におけるスキンシップの含意についての追加的な調査を行い、必要な定量的データを入手し追加分析する必要がある。これらの分析から、異文化理解を促すべく繊細な文化的相違についての実証的根拠を提示することが可能であろう。

初年度の活動として、広範囲な文献レビューとともに、主としてタッチング許容度に関する国内外におけるインタビュー調査資料の収集が行われた。

2年目と3年目においては、非言語コミュニケーション手段としてのタッチ性向に注目し、パーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響について日本人と韓国人を対象に比較調査を行った。人々の中には、タッチを好む人もいれば、そうでない人もいるが、このようなタッチ性向の高低の差をパーソナリティによって普遍的に説明しようと試みた。

パーソナリティがタッチ性向に及ぼす影響については、幼少期のタッチ経験や文化間相違、親和動機、依存欲求、性別などがかかわりがあると考え、これらをモデレータ変数として取り上げた。特に、親子間や友人間のタッチに注目し、その部位ならびに程度を調べ、日本人と韓国人のタッチ性向の相違を明らかにしようとした。

本調査の対象は、大学生の調査をメインとしながらも、大学生の振り返りによる過去記憶のデータを裏付ける目的と各成長段階別のタッチ表現の変化を考察する目的で、幼稚園児から高校生までを調査対象に含めた。中高生においては、親子のペア調査を行った。

本調査における幼児期から大学までの各成長段階別の調査は、大学生の過去記憶の裏付けデータとしてだけでなく、各成長段階別の特徴を明らかにするという意味においても価値があり、日韓の親子間非言語コミュニケーションの実態に関する文化的な比較データとしても意義があろうと考えられる。

調査方法として、質問紙調査による調査を行った。日本と韓国の幼稚園児保護者、小学低学年（2年生）保護者、小学校高学年（4年生）保護者、中学校生徒（2年生）と保護者、高校生徒（2年生）と保護者、大学生を対象に質問紙による調査を行い、およそ800部程度を回収し、分析を行った。

4. 研究成果

パーソナル・スペースやタッチング許容度は、日常レベルではあまり意識されないものの、タッチング場面や状況、タッチング部位や人間関係など、タッチング許容度測定に影響する要因は多い。そこで、タッチング許容度に対する文化的要因を探るためにインタビュー調査を実施した。また、既存の定量的な手持ちデータの解釈においては、「幼少期の経験」に関連する項目の過去想起的調査データの妥当性を検討する必要性が確認された。

つまり、個人のタッチング許容度は、自ら

の幼少期のタッチング経験や現在のコミュニケーション相手との関係性が影響していると考えられる。しかしながら、「幼少期の経験」に対する過去想起的調査の場合、過去想起への信憑性が問われることが多い。そこで、本研究のタッチング許容度調査における「幼少期の経験」に対する過去想起的部分への信憑性を高める方策として、実験参加者のみの調査ではなく、参加者の養育者（母親）を含んだ形の調査デザインを用いて調査を実施した。ここでは、日本の中学生の調査結果と日本の大学生の調査結果を中心に報告する。

まず、中学生の調査結果は以下の通りである。中学生本人のパーソナリティ特性が各々人のタッチ性向に及ぼす影響を分析した結果、外向性と情緒不安性、開放性がタッチ性向と有意な関係を示した (Fig. 1)。

次に、子どものパーソナリティ特性について、親の評定値と学生の自己評定値との平均値を用いた分析を試みた。その結果は学生本人の報告によるものとほぼ同様であった。

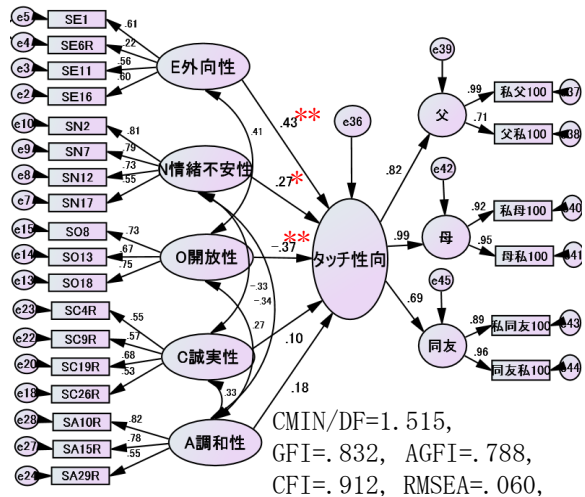


Figure. 1 性格特性がタッチ性向に及ぼす影響

もともと、子どものパーソナリティ特性についての親の評定は、子ども本人の自己評定と全項目において有意な差があり、親は子どもをよりポジティブに評価していることがうかがえる (表1)。

表1 性格評定における親子間の認識差

Big Five	M (SD)	t 値
外向性 (E)	2.68 (4.89)	6.52 ***
情緒不安性 (N)	-3.04 (6.70)	-5.41 ***
開放性 (O)	2.65 (6.79)	4.65 ***
誠実性 (C)	1.70 (9.02)	2.24 *
調和性 (A)	4.30 (7.90)	6.50 ***

同様に、親子間の認識差はタッチ度合いにおいても現れており、親が答えた子どものタッチ度合いと子ども自身が答えたタッチ度合いの間に有意差があった。特に、母から子

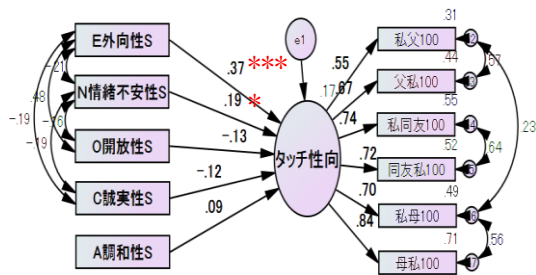
へのタッチ度合いに対する認識差は著しい(表2)。

表2 タッチ度合いに関する親子間の認識差

親-子	M (SD)	t値
子が父-私が父	2.24 (10.95)	2.44 *
父が子-父が私	6.01 (13.61)	5.26 ***
子が母-私が母	5.28 (14.64)	4.30 ***
母が子-母が私	15.42 (18.61)	10.11 ***

以上の結果から、中学生の場合、パーソナリティ特性は個々人のタッチ性向に影響を及ぼしていることが明らかとなった。ただし、パーソナリティ特性ならびにタッチ度合いの評価において、親子間で有意な差が認められた。これらは、成長期にある中学生と親の間の認識差の大きさを物語る結果といえる。

次に、大学生の分析結果である。日本の大学生を対象に、パーソナリティが個々人のタッチ性向に及ぼす影響を検討するために、共分散構造分析によるパス解析を行った。まず、Big Fiveの5つの因子すべてがタッチ性向に影響を及ぼすことを仮定して分析を行ったが、開放性、誠実性、調和性からタッチ性向へのパス係数は有意ではなく、外向性と情緒不安性のみがタッチ性向に対して正の有意なパスを示した。分析結果はFig. 2のとおりである。



$\chi^2=50.626$, $df=35$,
GFI=.956, AGFI=.918, CFI=.984,
RMSEA=.047,
AIC=112.626 * $p < .05$, *** $p < .001$,

Figure. 2 性格特性がタッチ性向に及ぼす影響

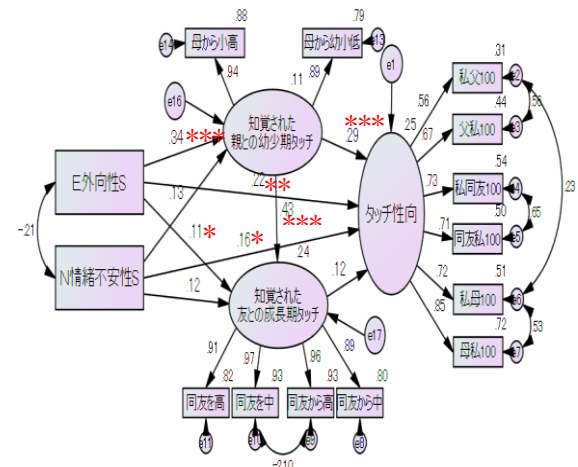
Fig. 2のパス図に基づき、男女のパラメータ間の差に対する検定統計量を求めたところ、外向性(.007)と情緒不安性(-.468)のいずれも、パスの影響力において男女間に有意な差は認められなかった。しかしながら、タッチ性向を構成する6つの観測変数の平均値については、表3のように男女間で有意な差が認められた。

表3 タッチ性向の男女平均値の差の検定 (M101/F106)

タッチ方向	男 M(SD)	女 M(SD)	t
私→父	2.77 (7.00)	5.59 (9.62)	-2.422 *
父→私	2.44 (6.25)	4.68 (8.32)	-2.200 *

私→同友	8.56 (11.67)	13.07 (12.60)	-2.671 **
同→友私	8.47 (13.52)	12.21 (12.26)	-2.082 *
私→母	2.88 (6.82)	13.24 (13.44)	-7.046 ***
母→私	3.26 (6.81)	12.51 (13.17)	-6.388 ***

次に、Big Fiveの5因子のうち、外向性と情緒不安性がタッチ性向に有意な影響を及ぼすとしたFig. 2の結果を踏まえ、これら2つの性格特性と知覚された親との幼少期タッチ経験、ならびに同性友人との成長期タッチ経験の関連性を考慮した分析を行った。Fig. 3にその結果が示されている。



$\chi^2=115.413$, $df=64$, GFI=.925, AGFI=.878,
CFI=.977, RMSEA=.062,
* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Figure. 3 性格特性・知覚されたタッチ・タッチ性向の関連性

上記の調査の結果、日本の中学生と大学生のいずれにおいても、パーソナリティ特性のうち、特に外向性と情緒不安性がタッチ性向に有意な影響を与えていることが確認できた。とりわけ女子においてその影響が顕著に現れた。また、各相手とのタッチ度合いにも男女差が認められた。さらに、幼少期におけるタッチ経験がタッチ性向に影響を及ぼすのか否かについては、高経験群と低経験群の比較から、タッチ経験の高低が、パーソナリティ特性とタッチ性向との関係において調節変数(モデレータ変数)として機能していることが明らかとなった。これまで独立的に行われてきたパーソナリティ研究とタッチ研究の融合を図ったことは、本研究の大きな貢献といえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①Mikyung Cho, Naoki Kugihara (2013) “The impact of the Big Five personality traits on the propensity to touch: based on a survey of university students in Korea” International Conference on Psychology toward Happiness ‘Health & Happiness (Conference book)’ p.5, Korean Psychological Association, 査読有

②曹美庚・釘原直樹 (2013) 「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響：日本人大学生の調査から」『日本心理学会発表論文集』p. 19, 日本心理学会, 査読有

③曹美庚・釘原直樹 「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響：日本の中学生とその保護者に対する調査分析を中心に」『日本社会心理学会発表論文集』p. 435, 日本社会心理学会, 査読有

[学会発表] (計4件)

①曹美庚 (2011. 10. 30) 「若者のパーソナル・スペースに関する日韓比較」異文化コミュニケーション学会第 26 回 2011 年度年次大会 (於・兵庫県立大学) (10 月 29 日-31 日)

②Mikyung Cho, Naoki Kugihara (2013. 08. 23) “The impact of the Big Five personality traits on the propensity to touch: based on a survey of university students in Korea” International Conference on Psychology toward Happiness ‘Health & Happiness (Conference book)’ , Korean Psychological Association (August 22 - 24) (at DCC, Daejeon, Korea)

③曹美庚・釘原直樹 (2013. 09. 20) 「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響：日本人大学生の調査から」日本心理学会第 77 回大会 (於・北海道医療大学札幌コンベンションセンター 札幌市産業振興センター) (9 月 19-21 日)

④曹美庚・釘原直樹 (2013. 11. 03) 「パーソナリティ特性がタッチ性向に及ぼす影響：日本の中学生とその保護者に対する調査分析を中心に」日本社会心理学会第 54 回大会 (於・沖縄国際大学) (11 月 2-3 日)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

曹美庚 (CHO, Mikyung)

阪南大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：30351985